

藤原定家・万葉集関係歌一覽

今 井 明

この一覽は藤原定家の歌を対象に、その本歌・参考歌など従来指摘されている万葉集歌を歌番号順に配列したものである。主として久保田淳『訳注藤原定家全歌集上・下』（一九八六年 河出書房新社刊）に拠ったが、私に加えたものもある。こうした一覽には他に新日本古典文学大系『古今和歌集』（一九八九年 岩波書店刊）付録の「派生歌一覽」（田村緑作成）がある。「派生歌一覽」はその調査対象に定家の家集をも含み、古今集に関する定家の本歌取りの足跡を俯瞰するのに大変便利なデータとなっている。本稿に示した一覽は定家歌に関するもののみで、田村の「派生歌一覽」には比ぶべくもないが、万葉集は中世和歌の表現史において常にその撰取の方法が取り沙汰された領域であるので、定家個人についてだけでもその足跡を俯瞰しう

るデータを提示したいと考えたのである。

行頭のアラビア数字は万葉集の旧『国歌大観』番号である。その下には藤原定家の歌学書『五代簡要』の抄録本文を『冷泉家時雨亭叢書37 五代簡要 定家歌学』（一九九六年 朝日新聞社刊）に拠って示した。その際「標記」と呼ばれる部分については、これを割愛した。

定家歌の本文・歌番号は久保田淳『訳注藤原定家全歌集上・下』（一九八六年 河出書房新社刊）に拠る。同書が底本の表記を復元しうるように残したルビは、これを割愛した。

なお、従来本歌・参考歌などと指摘されている万葉集の歌で『五代簡要』に抄録されていないものは、アラビア数字の上に◇記号を置き、『萬葉集 本文篇』（一九六三年

塙書房刊)の本文を示した。

〈藤原定家・万葉集関係歌一覽〉

巻第一

7 秋野^金におはなかりふきやとれりし うちの宮このかり
いほしそ思

秋の野に尾花かりふくやどよりもそでほしわぶる

けさの朝露 (一三八四)

◇11 吾勢子波 借廬作良須 草無者 小松下乃 草乎菊核

夕日かげさすや岡への玉篠を一夜のやどとたのみ
てぞ刈る (一四七七)

有つゝとまたれしもせぬ岡のかけひとよのやどに
をがやをぞ芟 (一六二二)

28 白妙の衣乾有あまのかく山

大井河かはらぬるぜきおのれさへ夏きにけりと衣
ほす也 (一二二二)

白妙の衣ほすてふ夏のきてかきねもたわにさける

卯花 (一八八七)

花ざかり霞の衣ほころびてみね白たへのあまの香

具山 (二〇五八)

夏の来て卯の花白くぬぎかふる衣乾るらし天の香

具山 (四〇五四)

31 しかのおほわた

五月雨に舟路も遠く立波のおのれたゆたふ志賀の

大わた (四〇五八)

34 白浪のはまゝつかえのたむけくさ

風渡はま松が枝のたむけぐさなびくにつけて夏や
すぎぬる (二〇〇四)

たむけ草露もいくよかちぎりおきし濱松がえの色
もかはらず (二三九〇)

つれもなく猶住の江にたむけ草ひきすてらるゝ道
のくちばを (二七〇三)

◇38 安見知之 吾大王 神長柄 神佐備世須登 芳野川

多藝津河内尔 (以下略)

み吉野やたぎつ河内の春の風神世もきかぬ花ぞみ
なぎる (一八七二)

◇39 山川毛 因而奉流 神長柄 多藝津河内尔 船出為加

母

み吉野やたぎつ河内の春の風神世もきかぬ花ぞみ
なぎる (一八七二)

51 たをやめのそてふきかへすあすか、せ

たをやめの袖かもみぢかあすか風いたづらにふく
霧のをちかた (一七〇六)

飛鳥川とほき梅がえにほふ夜はいたづらにやは春
風の吹(二〇三七)

草枕みやをとほみいたづらにゆき、の月のやど
るしらつゆ(二一九二)

飛鳥川今はふるさと吹風の身はいたづらに秋ぞか
なしき(二五八一)

とぶとりの飛鳥河風それもかと袖ふきかへし花ぞ
ふりしく(二七五〇)

たをやめの袖のうら風ふきかへせそめてうつろふ
色はむなしと(三七一〇)

57 ひくまのに、ほふはきはら

もろ人の心いるらしあづさ弓ひくまの野べの秋萩
の花(二〇〇七)

63 みつのはま、つまちこひぬらむ

大伴の御津の濱風ふきはらへ松とも見えじうづむ
白雪(一一四八)

待ちこひし昔は今もしのばれてかたみひさしき御
津の濱松(一三〇〇)

78 とふとりのあすかのさと

冬はたゞ飛鳥の里のたびまくらおきてやいなん秋
のしら露(一〇五五)

◇87 在管裳 君乎者將^レ待 打靡 吾黒髮尔 霜乃置萬代
日

黒髪のながきやみぢもあけぬらんおきまよふ霜の
消ゆる朝日に(二七七〇)

◇90 君之行 氣長久成奴 山多豆乃 迎乎將^レ往 待尔者
不^レ待

紫のくもまにけふやむかふらん待ちには待たぬ心
かよはば(二七七七)

107 あしひきの山のしづく

終夜山のしづくにたちぬれて花のうはぎは露もか
わかず(五四六)

ほとゝぎすがしのゝめを音にたてて山のしづく
に羽しをるらむ(二一一三)

時鳥山のしづくに立ちぬれて待つとはしるやあか
つきの聲(三八五一)

110 かるくさのつかのあひた

いかにして向ひの岡にかかる草のつかのまにだに露
の影みむ(一三七八)

133 さ、のは、みやまもさやにみたる

草枕ゆふ露はらふさ、のはのみ山もそよにいく夜
しをれぬ(九八一)

さ、枕み山もさやにてる月の千世も経ばかりかけ

のひさしさ(二二九五)

◇144 磐代之 野中尔立有 結松 情毛不_レ解 古所_レ念

いはしろの野中さえゆく松風にむすびそへつる秋
のはつ霜(一〇五四)

卷第三

◇251 粟路之 野嶋之前乃 濱風尔 妹之結 紐吹返

おもかげはひもゆふぐれにたちそひて野島によす
る秋の浦波(一二四八)

茸く尾花露のかり庵むすびてもかたみの紐はとく
よひもがな(三七〇四)

254 ともし火のあかしのせと

燈の明石のおきの友舟もゆく方たどる秋のゆふぐ
れ(一二四九)

264 ものゝふのやそうちかは いさよふなみ

網代木や波のきりまに袖見えて八十字治人は今か
とふらむ(一八四〇)

網代木にさくらこきませゆく春のいさよふ波をえ
やはと_レむる(二〇七九)

265 みわのさきさのゝわたり ふりくるあめ

こまとめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたり
の雪の夕暮(九六七)

ゆくゑなきやどはと問へばなみだのみ佐野のわた

りの村雨のそら(二四二八)

◇280 去来兒等 倭部早 白菅乃 真野乃榛原 手折而將_レ

歸

をる人はいさ白菅の眞野の萩わがたちぬるゝ露の
にしきか(三一一〇)

281 しらすけのまのゝはきはら

むすぶ露おきふす風の色ごとに心みだるゝ眞野の
萩原(三〇六一)

をる人はいさ白菅の眞野の萩わがたちぬるゝ露の
にしきか(三一一〇)

◇328 青丹吉 寧樂乃京師者 咲花乃 薫如 今盛有

あをによし奈良のみやこの玉柳色にもしるく春は
きにけり(一三〇九)

396 みちのくのまのゝかやはらとをけれど

雪ふかき眞野のかやはらあとたえてまだこととほ
し春の倂(一〇六九)

露わけむ秋の朝けはとほからでみやこやいくか眞
野のかや原(三八四一)

卷第四

496 みくまのゝうらのはまゆふ もゝへなる

我もおもふ浦のはまゆふいくへかはかさねて人を
かつたのめとも(七三七)

時のまのよはの衣のはまゆふやなげきそふべきみ
熊野の浦(二二七七)

500 神風のいせのはまをき あらきはまへ

たびねするあらしはまへの浪の音にいとちちそ
ふ人の倂(五七七)

二見瀉伊勢の濱荻しきたへの衣手かれて夢もむす
ばず(二二七九)

月にふす伊勢の濱荻此宵もやあらしそべの秋を
しのばむ(二一五八)

待つほどをかたらぬ月にかこつともしらでや寝ら
ん荒き濱邊に(二一八六)

501 おとめらかそてふる山のみつかきのひさしき

賀茂山やいくらの人をみづがきのひさしき世より
あはれかく覽(七八五)

花の色をそれかとぞ思をとめごが袖ふる山の春の
あけぼの(九一五)

幾千代ぞそでふる山のみづがきもおよばぬ池にす
める月かげ(二一八二)

幾世へぬ袖振山のみづがきにたえぬ思ひのしめを
かけつと(四〇〇〇)

521 あさてかりほしきしのふあつまをんな

東野の露のかりねのかやむしろ見ゆらんきえてし

き惚ぶとは(二四七六)

536 おくのうみのしほひのかた 出雲殿

たづね見るつらき心のおくの海よ潮干のかたのい
ふかひもなし(一〇八二)

563 くろかみにしろかみましり

くろかみはまじりし雪のいろながら心のいろはか
はりやはせし(三九七)

571 月よ、しかはのをとすめり

秋の月河音すみてあかす夜にをちかた人のたれを
とふらん(二三四二)

588 しろとりのとはやま、つ

やすらひにいでけん方も白鳥の飛羽山松のねにの
みぞなく(二一六八)

617 あしへよりみちくるしほのいやまし

よなくは身もうきぬべし蘆べよりみちくるしほ
のまさる思ひに(二八二)

632 てにはとられぬ月のうちのかつら

あまのはらそらゆく月の光かは手にとるからに雲
のよそなる(一六五)

◇664 石上 零十方雨二 将關哉 妹似相武登 言義之鬼

尾

さはらずはこよひぞきみをたのむべき袖には雨の

時わかねども（八七九）

672 しつつたまきかすにもあらぬいのちもて

如何せん浪こす袖にちる玉のかずにもあらぬしづ

のをだまき（一三七九）

678 たまきはるいのちにむかふ

變れたゞわかるゝ道の野邊の露いのちにむかふも

のも思はじ（八六〇）

終夜月にうれへてねをぞなくいのちにむかふ物思

ふとて（一三七五）

688 あをやまをよこさるくも

うらみ^{なげか}じなみねに雲るる木幡山あらはれてだに

こゝろかよはば（三七七七）

727 わすれくさわかしたひもにつけたれと おにのしこく

さ事にしありけり

したひもの結ふ手もたゆきかひもなし忘るゝ草を

君やつつけむ（一三八五）

737 わかさちのゝちせの山

たのめおきし後瀬の山のひとことや戀をいのりの

命なりける（一一六五）

やどれ月衣手おもし旅枕たつや後瀬の山のしづく

に（二五四二）

739 のちせ山のちもあはむとおもふ こそしぬへきものを

けふまでもあれ

たのめおきし後瀬の山のひとことや戀をいのりの

命なりける（一一六五）

巻第五

811 きみかてなれのこと

昔きくきみがてなれの琴ならばゆめにしられてね

をもたてまし（八九二）

854 たましまのこのかはかみ まつらかは

いつかさは又は逢せを松浦がたこの河かみに家は

すむとも（八八二）

ひかりさす玉島河の月清みをとめの衣袖さへぞて

る（一一三六）

梅が香やまづうつるらんかげきよき玉島河の花の

かゞみに（一一〇二）

あともなしこぼれておつる白雪の玉島川の河上の

里（四五七六）

◇ 856 麻都良奈流 多麻之麻河波尔 阿由都流等 多々世流

古良何 伊弊遲斯良受毛

ひかりさす玉島河の月清みをとめの衣袖さへぞて

る（一一三六）

860 まつらかはなゝせのよと

いのちだにあらばあふせを松浦河かへらぬ浪もよ

どめとぞ思 (一一七三)

868 まつらかたさよひめのこかひれふりし

蟬のはの衣に秋を松浦濁ひれふる山のくれぞす

しき (一一三〇)

◇ 872 夜麻能奈等 伊寶都夏等可母 佐用比賣河 許能野麻

能閉仁 必例遠布利家牟

蟬のはの衣に秋を松浦濁ひれふる山のくれぞす

しき (一一三〇)

卷第六

908 みよしの、きよきかうち

吉野河たぎついは浪せきもあへずはやくすぎゆく

花のころ哉 (一〇一九)

912 はつせめをつくるゆふはな たきのみなわ

泊瀬女のならず夕の山風も秋にはたへぬしづのを

だまき (一一三二)

つくるてふ初瀬をとめのゆふまぐれ川波たかくか

くる卯花 (三七六〇)

◇ 919 若浦尔 塩満来者 滷乎無美 葦邊乎指天 多頭鳴渡

寄りくべき方もなぎさのもしほ草かきつくしてし

和歌の浦波 (一一二九八)

◇ 925 鳥玉之 夜乃深去者 久木生留 清河原尔 知鳥數鳴

さ夜千鳥やちよと神やをしふらんきよきかはらに

君いのる也 (二七一五)

928 あしかきのよしの、さと

み空ゆく月もまぢかし葦垣の吉野の里の雪のあさ

けに (二三五四)

白雪の日数やいくかあし垣の吉野の里はまぢかか

らねど (三六九〇)

935 あはちしま、つほのうら

こぬ人を松帆の浦のゆふなぎにやくや藻鹽の身も

こがれつ、(二四四七)

955 さ、たけの大宮人のいとすむ

ちりもせじ衣にすれるさ、竹の大宮人のかざす櫻

は (二〇二四)

◇ 994 振仰而 若月見者 一目見之 人乃眉引 所念可聞

おもかげのひかふる方にかへり見るみやこの山は

月織くして (二六一三)

997 すみよしのこすのとこなつさくもみず

よそへてのかひこそなけれまつ人はこずの床夏花

にさけども (一一三三一)

1010 まきのはしのきふるゆき

山ふかきまきの葉しのぐ雪をみてしばしは住まん

人とはずとも (三六六)

1048 道のしはくさなかくおひにけり 古京

立とまる道の芝草わけすててながき日かげをゆき

ぞわづらふ(三七六二)

1059 みかのはらくにの宮こ

みかのはら久邇の京の山こえてむかしやとほきさをしかの聲(一一三二)

卷第七

◇1086 鞞懸流 伴雄廣伎 大伴尔 國將榮_レ常 月者照良思

月にうつ民の衣もやどごとに國さかえたるみよぞきこゆる(二一六六)

1092 まきむくのひはらの山

卷向や檜原のしげみかきわけて昔のあとをたづねてぞ見る(七四三)

1118 みわのひはらにかさしをりけん

いく世へぬかざし折りけんいにしへに三輪の檜原のこけのかよひぢ(一〇九三)

三輪の山五月の空のひまなきに檜原のこゑぞ雨をそふなる(一四二四)

1128 いは井の水

いくとせぞ見し柴の戸は人すまで石井の水にしげる萍(一六〇四)

1134 吉野河いはとかしは

吉野河いはとかしはをこす浪のときはかきはぞわ

が君の御代(一二八二)

1140 しなかとりるなのをゆけはありま山

みじか夜の猪名の笹原かりそめにあかせばあけぬ宿はなくとも(一二三三)

◇1199 藻荇舟 奥榜来良之 妹之嶋 形見之浦尔 鶴翔所_レ

見

これやさは秋のかたみのうらならむかはらぬ色を沖の月かげ(一〇六四)

1214 あたへゆくをすての山のまきのはもひさしくみねはこけをいにけり

眞木の葉のふかきをすての山におふるこけのしたまで猶やうらみむ(一一七四)

1220 きのくにのゆらのみさき たまひろふ

花鳥のにほひも聲もさもあらばあれ由良の御崎の春のひぐらし(一二一五)

1228 かせはやのみほのうらへをこくふね

風さむみ三穂の浦べをこぐ舟に山の木の葉のきほひがほなる(一三五七)

1241 むはたまのくろかみ山

とこなるゝ山した露の起き臥に袖のしづくは宮こにも似ず(一四八五)

1246 しかのあまのやくしほけふり風をいたみ

浦風にやくしほけぶりふきまよひたなびく山の冬
ぞさびしき(一〇六五)

◇1253 神樂浪之 思我津乃白水郎者 吾無二 潜者莫為 浪
雖_レ不_レ立

けふぞとふ志賀津のあまのすむ里を鶯さそふ花の
しるべに(二〇三五)

◇1280 撃日刺 宮路行舟 吾裳破 玉緒 念妄 家在矣

天つ風よきてふかなんうちひさす宮路のさくら今
さかりなり(三八七二)

◇1295 春日在 三笠乃山二 月船出 遊士之 飲酒坏尔 陰
尔所_レ見管

色にいでてあきの梢ぞうつりゆくむかひのみねの
うかぶ坏(一五四二)

1306 この山のもみちのしたの花なれは
ちぎりありてうつろはむとや白菊の紅葉のしたの
花にさきけん(一三五二)

1316 かうちめのでそめのいと

生駒山あらしも秋の色にふく手染めの絲のよるぞ
かなしき(一二四二)

1328 ひさにふすたまのをこと

いへばえにおさふる袖も朽はてぬ玉の小琴の秋の
しらべに(一九七四)

1348 みしまえのたまえのこも

わがしめし玉江の蘆のよをへては刈らねど見えぬ
さみだれのころ(九三〇)

1403 みぬさとるみわのはふりか

みぬさとる三輪の祝やうゑおきしゆふしで白くか
くる卯花(一九二〇)

1413 にはつとりかけのたれをのみたれをの

ねにたつるかけのたれ尾のたれゆゑかみだれて物
は思そめてし(一三八三)

卷第八

1418 いはそ、くたるみのうへのさわらひ

いはそ、く清水も春のこゑたててうちやいでつる
谷のさわらび(四〇九)

1419 神なひのいはせのもりのよふことり

春きぬと岩瀬の杜の鶯のはつねを誰につげはじむ
らん(三四六五)

1424 すみれつみにとこしわれそのをなつかしみ

すみれさくひばりのとこにやどかりて野をなつか
しみくらす春哉(一八九八)

思どち春のかたみにすみれつむ野原のまとる雨ぞ
そぼふる(二九〇九)

すみれつむ野べの霞にやどかれば衣をうすみ月は

もりつゝ、(三三三四)

1446 はるのゝにあさるきゝす

檜柴もかれゆくきゝす影をなみたつや狩場のおの
がありかを(一三六三)

◇1450 情具伎 物尔曾有鶏類 春霞 多奈引時尔 戀乃繁者

心うき里としりにしこひなれば輪廻の霞いまやは
るらん(二七七八)

1455 たまきはるいのちにむかふ こひよりは

變れたゝわかるゝ道の野邊の露いのちにむかふも
のも思はじ(八六〇)

終夜月にうれへてねをぞなくいのちにむかふ物思
ふとて(一三七五)

1466 神なひのいはせのもりの郭公

春きぬと岩瀬の杜の鶯のはつねを誰につげはじむ
らん(三四六五)

1500 夏草のしけみにましるひめゆりの

さゆり葉にまじる夏草しげりあひてしられぬ世に
ぞくちぬと思し(一一一七)

さゆりばのしられぬ戀もある物を身よりあまりて
ゆくほたる哉(一三三〇)

打なびくしげみがしたのさゆりばのしられぬほど
にかよふ秋風(一六四六)

さゆり葉の知られぬしたに咲く花の草のしげみに
などまじりけん(三四二七)

かりねせししげみの枕結ばれてけさあらはるるし
たのさゆりば(三八七二)

1512 たてもなくぬきもさためすおとめこか おれるもみち
かりがねの涙の露のたまながらぬきもさだめず織
るにしき哉(一三五〇)

龍田姫雲のはたてにかけておる秋の衣はぬきもさ
だめず(一九三七)

1555 秋たちていくかもあらねとこのねぬる

きのふけふあさけばかりの秋風にさそはれわたる
木々の白露(一四二九)

賤の女が織や衣の朝明に袖もまどほの秋の初風
(四〇六四)

1595 秋はきのえたもとをゝにをくつゆ

風ふけばえだもとをゝにおく露のちるさへをしき
秋萩の花(三三三)

巻第九

1693 たまくしけあけまくをしきあたたらよ

二見瀉伊勢の濱萩しきたへの衣手かれて夢もむす
ばず(一二七九)

玉匣ふたみのうらの秋の月あけまくつらきあたたら

夜のそら（二七〇一）

1715 さゝなみのひら山風のうみふけは

さゝなみやさくらふきかへす浦風をつりするあまの袖かとぞ見る（一七四四）

志賀の浦や釣する船の袖もみなさくらながらの山の夕風（四〇〇九）

1736 しらゆふはなにおちたきつなつみのかは

影きよき夏實の川と秋かけてしらゆふ花をてらす夜の月（二二二〇）

1747 しらくものたつたの山のたきのうへのをくらのみね

白雲の春はかさねてたつた山をぐらの峯に花にほふらし（九一三）

昨日けふ山のかひより白雲の立田のさくら今かさくらん（一三二一）

◇ 1768 石上 振乃早田乃 穂尔波不_レ出 心中尔 戀流比日

秋もまたずほず糸に雲のなびくまでふるの山田の五月雨のそら（三七三八）

卷第十

1840 むめかえになきてうつろふうくひす

くるとあくとも目かれぬ花に鶯のなきてうつろふこ糸なをしへそ（一三〇六）

1897 はるなれはもすのくさくき見えすとも

かりに結ふいほりも雪にうづもれて尋ぞわぶるも

ずの草ぐき（二九四）

◇ 1927 石上 振乃神杉 神備西 吾八更々 戀尔相尔家留

いその神布留の神杉ふりぬともときはかきはのかげはかはらじ（七四二）

1974 ふち^{カスガ}はちりすきてなにをかもみかりの人のおりてかさゝん

色まがふ野べの藤波袖かけてみかりの人のかざし折るらし（一三一九）

1994 夏草のつゆわけ衣

夏草のつゆわけ衣ほしもあへず假寝ながらにあくるしのゝめ（九三二）

秋草の露わけ衣おきもせずねもせぬ袖はほすひまもなし（二四六九）

1995 みな月のつちさへさけてゝるひ

たちのぼり南のはてに雲はあれど照る日くまなきころの虚（一五二六）

大かたの日かげにいとふ水無月のそらさへをしき常夏の花（一八八九）

2013 あまの河水かけくさ なひく

天の河水かけぐさの打なびきたまのかづらも露こぼるらん（二二三三）

2018 こそのわたりのうつろへは

天河ふるきわたりもうつろひて月のかつらぞ色に
いでゆく(二二三四)

2063 たなはたの雲の衣

あまのがは川門のなみの秋風にくもの衣をたつや
とぞ待つ(二二三五)

2065 手たまもゆらにおるはた

たなばたの手だまもゆらに織るはたを折しもなら
ふ蟲の聲哉(二三三七)

天河手だまもゆらに織るはたのながき契りはいつ
かたえせん(二二三六)

◇ 2078 玉葛 不_レ絶物可良 佐宿者 年之渡尔 直一夜耳

あまの河年の渡の秋かけてさやかになりぬ夏の夜
のやみ(七〇四)

◇ 2096 真葛原 名引秋風 毎_レ吹 阿太乃大野之 芽子花散

かたみこそあたの大野の萩の露うつろふ色はいふ
かひもなし(二一七〇)

2117 おとめこにゆきあひのわせをかる時に

門田吹はつ風すゝしたなばたのゆきあひのわせの
日をかぞへつゝ(三七六三)

◇ 2193 秋風之 日異吹者 水莖能 岡之木葉毛 色付尔家里

水莖の岡のまくずをあまのすむ里のしるべと秋風

ぞふく(二二三五)

2196 時雨のあめまなくしふれはまきのはもあらそひかねて
山めぐり猶しぐるなり秋にだにあらそひかねしま
きの下葉を(九五七)

2208 水くきのおかのくすは、いろつきにけり

みづく木のをかのくすはらふきかへし衣手うすき
秋のはつ風(一〇三七)

水莖の岡のまくずをあまのすむ里のしるべと秋風
ぞふく(二二三五)

2220 さをしかのつまよふ山のおかへなるわさはからし

さをしかのつまどふ小田に霜おきて月影寒し岡の
べのやど(二一六三)

2247 秋の田のほむけのよするかたよりに

門田ふくほむけの風のよるくは月ぞいなばの秋
をかりける(二一一七)

◇ 2266 出去者 天飛鴈之 可_レ泣美 且今日々々云二年
曾經去家類

わきてよもあまとぶ雁のおきもせじ宿からふかき
萩のあさ露(一九二八)

2270 道のへのおはなかもとの思草

霜むすぶをばながもとの思草きえなむ後や色にい
づべき(七三五)

道のべのひとごとしげき思草霜のふり葉と朽ぞは
てぬる（二四七五）

霜うづむをばながしたの枯れまより色めづらしき
花の紫（二八四三）

2277 さをしかのいるのゝすゝきはつをはな

ゆふづくよいるのの尾花ほのくゝと風にぞつたふ
さをしかのこ糸（二七〇〇）

2285 あきはきのはなのゝすゝきはほにはいてす

朝霜の花野のすゝきおきてゆくをちかた人のそで
かとぞ見る（二一四二）

卷第十一

2353 はつせのやゆつきかしたにわかゝくしたるつま

初瀬のや齋槻がしたにかくろひて人にしられぬ秋
風ぞ吹（一一二五）

初瀬山弓槻がしたにてる月のあくるもしらぬあり
あけのかけ（二一六〇）

2356 こまにしきひものかたへそとこにおちにける

泉河日もゆふぐれの高麗錦かたへおちゆく秋のも
みぢ葉（一三五四）

◇ 2365 内日左須 宮道尔相之 人妻妬 玉緒之 念乱而 宿

夜四曾多寸

天つ風よきてふかなんうちひさす宮路のさくら今

さかりなり（三八七一）

2370 玉梓の道行人にことつてもなし

玉梓の道ゆき人のことづてもたえてほどふる五月
雨のそら（四二八）

2417 いその神ふるのかみすき神なれや

いその神布留の神杉ふりぬともときはかきはのか
げはかはらじ（七四二）

2430 このかはのみなわさかまきゆく水

はやせ河水泡さかまきゆく浪のとまらぬ秋を何を
しむ覽（二二三三）

2475 わかやとのゝきのしたくさ

あれにけりのきのしたくさ葉をしげみ昔しのぶの
末の白露（七三六）

風わたるのきのしたくさ打しをれすゝしくにほふ
夕立のそら（八二四）

2478 あきかしはぬるかゝはへ

夏はててぬるや川べのしのゝめに袖ふきかふる秋
のはつ風（二二六一）

2483 しきたへの衣手かれて

しきたへの衣手かれていく日へぬ草を冬野のゆふ
ぐれのそら（一一七九）

2541 たちわかれゆくみのさとにいもをきて心そらなりつ

ちはふめとも

春がすみ心もそらにたちわかれゆゝみのさとをい

づるかりがね(三七八五)

◇ 2607 敷細之 衣手可礼手 吾乎待登 在濫子等者 面影尔

見

しきたへの衣手かれていく日へぬ草を冬野のゆふ

ぐれのそら(一一七九)

2617 あしひきの山さくらとをあげをきて

あしびきの山さくら戸をまれにあげて花こそある

じ誰をまつ覧(一九一六)

名もしるし峯のあらしも雪と降る山さくら戸のあ

けぼのの空(二〇七五)

色に出ていひなしをりそ櫻戸の明ながらなる春の

袂を(三六三三)

2622 しかのあまのしほやき衣

里のあまのしほやき衣たちわかれなれしもしらぬ

春のかりがね(二〇五〇)

2638 あつさゆみす糸のはらのとかりする きみかゆつる

のたえんと思へや

契りおきしす糸のはらののもと柏それともしらじ

よその霜枯(一八七八)

◇ 2643 玉戈之 道行疲 伊奈武思侶 敷而毛君乎 将見因

母鴨

夏の日をみちゆきつかれいなむしろなびく柳に

すゝむ川風(一六九五)

2648 ひた人のうつすみなはの

ひだたくみうつ墨繩を心にて猶とにかくに君をこ

そ思へ(二四五八)

◇ 2670 真素鏡 清月夜之 湯徙去者 念者不止 戀社益

秋をへてくもる涙のますかゝみきよき月夜もうた

がはれつゝ(九四六)

2687 さくらあさのをふのしたくさ つゆ

櫻麻のをふのしたつゆ下にのみわけてくちぬるよ

なくの袖(七三八)

さらぬだにあだにちるてふ櫻麻の露もたまらぬ秋

の初風(一三三六)

さくらあさの苧生のうら風春ふけば霞をわくる浪

のはつ花(一八六五)

2696 あらくまのすむといふ山のしはお山

思ふにはおくれんものか荒熊のすむてふ山のしば

しなりとも(七六七)

2731 うしまとのなみのしほさひ

わすれぬは浪ちの月にうれへつゝ身を牛窓にとま

る舟人(二四二四)

2753 なみまよりみゆるこしまのはまひさ木

知るらめやたゆたふ舟の波間より見ゆる小嶋の本
の心を(三六五三)

2754 あさかしはぬるやかはへのしのゝめ

夏の月はまだよひのまとながめつゝ寝るやかはべ
のしのゝめのそら(一〇三三)

夏はててぬるや川べのしのゝめに袖ふきかふる秋
のはつ風(二二六一)

2763 くれなるのあさはのゝら

冬はまだ浅葉の野らにおく霜の雪よりふかきし
のゝめのみち(九五九)

2776 道のへのくさをふゆのにふみからし

おもかげの身にそふやどに我まつとをしまぬ草や
しもがれぬ覽(一六七六)

2798 いせのあまのあはひのかひ

にほの海のあさな夕なにながめしてよるべなきさ
の名にやくちなん(二七一三)

2838 かはかみにあらふわかなのなかれても

ながれても思ふせによる若芹のねにあらはれてこ
ひんとや見し(七四〇)

2839 おほあらしのうきたのもりのしめならなくに

わがなかは浮田のみしめかけかへていくたびくち

ぬ杜の下葉も(二四一四)

君はひけ身こそ浮田の杜のしめたゞひとすぢにた
のむ心を(二五六九)

卷十二

◇2891 荒玉之 年緒長 如此戀者 信吾命 全有目八面

あら玉の年の緒ながき秋の夜に月や契をむすびは
つべき(四〇三四)

2981 はふりこかいのるみむろのますかゝみかけて

神さびていはふ御室の年ふりて猶ゆふかくる松の
白雪(二七一六)

3002 あしひきの山よりいつる月まつと

久方の月ぞかはらでまたれける人にはいひし山の
はのそら(一〇九〇)

月まつといはでぞたれもながめつる闇にはうとき

夏の夜の空(二八二〇)

3042 あさ日さすかすかのをのにおくつゆの

朝日さす春日の小野のおのづからまづあらはるゝ
雪のしたくさ(一三〇二)

3048 みかりするかりはのをのゝならしはの

ちぎりのみいとゞかりばのならしはたえぬ思ひ
の色ぞまされる(二四四三)

ふみかよふ道もかりばのおのれのみこひはまされ

るなげきをぞする (二四九八)

◇ 3068 水莖之 岡乃田葛葉緒 吹變 面知兒等之 不_レ見比
鴨

みづく木のをかのくずはらふきかへし衣手うすき

秋のはつ風 (一〇三七)

水莖の岡のまぐずをあまのすむ里のしるべと秋風

ぞふく (一二三五)

3071 丹波ちのおほえの山のたまかつら

ゆふすゞみ大江の山の玉かつら秋をかけたる露ぞ

こぼるゝ (一二二七)

◇ 3081 玉緒乎 片緒_レ搓而 緒乎弱弥 乱時_レ尔 不_レ戀有日
八方

片絲のあふとはなしにたまのをもたえぬ許ぞ思み

だるゝ (一〇七九)

3088 戀衣きなれの山になくとり

たび衣きなれの山の峯のくもかさなるよはをした

ふ夢哉 (一六七四)

3097 さひのくまひのくま河にこまとめて

こまとめし檜隈河の水きよみ夜わたる月の影のみ

ぞ見る (一〇九四)

3156 すゝかゝはやそせわたりてたれゆへか

いはでのみ年ふるこひを鈴鹿川八十瀬の浪ぞ袖に

みなぎる (二七二)

鈴鹿川八十瀬ふみわたるみてぐらも君が世ながく
千世の長月 (一二八二)

鈴鹿河やそせの波の春の色はふりしく花のふちと

こそなれ (一七三八)

◇ 3173 松浦舟 乱穿江之 水尾早 櫂取間無 所_レ念鴨

こぬ人をつきせぬ浪に松浦舟よるとは月のかげを
のみ見て (一七七六)

3182 白妙の袖の別はおしけれと

白妙の袖のわかれに露落て身にしむ色の秋風ぞふ

く (二四二九)

たち花の花ちる庭は白たへのそでのわかれし香ぞ

にほひつゝ (三六七五)

つかのまも忘れん物か出でがてに月をしぼりし袖

のわかれは (三八四四)

3195 いは木山 いそさきのこぬみのはま

こまなづむいは木の山をこえわびて人もこぬみの

濱にかもねむ (九八四)

3201 時つ風ふけるのはまにいてゐつゝあかふいのち

時つ風吹飯の浦にあがひてもたがためにかは身を

もをしみし (一〇八九)

3215 そてのわかれをかたみにてあらつのはまにやとりする

かも

浪枕はま風しろくやどる月そでのわかれのかたみがほなる(一三九三)

卷第十三

◇ 3231 月日 攝友 久経流 三諸之山 礪津宮地

久に經る三室の山のさか木葉ぞ月日はゆけどいろもかはらぬ(一五〇〇)

◇ 3339 (前略) 立浪裳 篋跡丹者不_レ起 恐耶 神之渡乃 敷浪乃 寄濱部丹(後略)

わたつ海によせてはかへるしきなみのはじめもはてもしる人ぞなき(七一一)

卷第十四

3355 あまのはらふしのしは山

あまのはら富士の柴山しばらくもけぶりたえせず雪も消なくに(一二八三)

◇ 3371 安思我良乃 美佐可加思古美 久毛利欲能 阿我志多 婆倍乎 許知弓都流可毛

こえわぶる木の下やみの霧のまにありあけしらぬ足柄の山(三七七九)

3373 たまかはにさらすてつくりさらく
手づくりやさらすかきねの朝露をつらぬきとめぬ
玉河の里(一二九二)

3378 おほやかはらのいはるつら

我戀は大家が原の岩ひつら手にはとれ共ぬるよしもなし(四〇八六)

◇ 3380 佐吉多萬能 津尔平流布祢乃 可是乎伊多美 都奈波

多由登毛 許登奈多延曾祢
さえ暮るすさきに立てる埼玉の津にをる舟も氷閉つ、(四〇七八)

3387 あのをとせずゆかむこまもか かつしかのま、のつきはし

わすられぬ真間の繼橋おもひねにかよひし方は夢に見えつ、(一一七五)

3391 つくはねにそかひにみゆるあしほ山

あしほ山やまず心は筑波嶺のそがひにだにも見らくなきころ(一二六四)

3508 しはつきのみうらさきなるねつこくさ

影ばかり見うら崎なるねつこ草下にもえつ、年はへにけり(四〇八五)

3530 さをしかのふすやくさむら見えすとも

さをしかのふすや草むらうらがれて下もあらはに秋風ぞふく(一〇五三)

卷第十五

3599 月よみのひかりをきよみ神 しまのいそまのうらにふ

なてすわれは

梓弓磯間の浦にひく網の目にかけてながらあはぬ戀

哉（一二七二）

3716 長月のもみちの山もうつろひにけり

長月の紅葉の山のゆふしぐれはるゝひかげも雲は

そめけり（一三五三）

卷第十六

3787 いやとしのは

あはれのみいや年のはに色まさる月と露との野べ

の笹原（一三四〇）

3814 白玉のをたえしにきときゝしゆへ

白玉の緒絶の橋の名もつらしくだけておつる袖の

涙に（一一五九）

卷第十七

◇ 3900 多奈波多之 船乗須良之 麻蘇鏡 吉欲伎月夜尔 雲

起和多流

秋をへてくもる涙のますかゝみきよき月夜もうた

がはれつゝ、（九四六）

3922 ふるゆきのしろかみまてにおほきみにつかへまつれは

霜雪の白髪まではつかへきぬ君が八千代をいはひ

おくとて（一四九七）

卷第十八

4056 ほり江にはたましかましをおほきみのみふねこかんと

かねてしりせは

おしてゐるや難波堀江にしく玉の夜の光はほたるな

りけり（一二二八）

卷第十九

◇ 4139 春苑 紅尔保布 桃花 下照道尔 出立嬷孀

露じものしたてるにしき立田姫わかるゝそでもう

つる許に（一二二九〇）

◇ 4153 漢人毛 筏浮而 遊云 今日曾和我勢故 花縵世奈

からひとのあとをつたふるさかづきの浪にしたが

ふけふもきにけり（八一三）

4154 とりふみたてゝしらぬりの小鈴もゆらに

岩瀬野やとりふみたててはしたかの小鈴もゆらに

雪はふりつゝ、（二〇一九）

4169 なこのあまのかつきとるてふ白玉

奈呉のあまのかづく白玉たまさかにいでてかへら

ぬやみ路ともがな（三七〇六）

◇ 4292 宇良宇良尔 照流春日尔 比婆理安我里 情悲毛 比

登里志於母倍婆

すみわびてあがるひばりのしるき哉又かげもなき

春の若草（二九一三）

卷第二十

4357 わきもこかそてもしほ、

夕立に袖もしをる、かり衣かつうつり行遠かたの
雲(三五九一)

◇ 4433 阿佐奈佐奈 安我流比婆理尔 奈理弓之可 美也古尔

由伎弓 波夜加弊里許牟

すみわびてあがるひばりのしるき哉又かげもなき

春の若草(二九一三)

4434 ひはりあかる春へとさやになりぬれはみ^さやこ^もみえす

かすみたなひく

すみわびてあがるひばりのしるき哉又かげもなき

春の若草(二九一三)

◇ 4458 尔保籽里乃 於吉奈我河波半 多延奴等母 伎美尔可

多良武 己等都奇米也母

こほりゐて息長河のたえしよりかよひしにほのあ

とを見ぬ哉(一四四一)

4494 水鳥の鴨の羽色のあおき馬をけふみる人はかきりなし

といふ

春ごとのかもの羽色の駒なれどけふをぞ曳かむち

よのためしに(二〇二七)

(以上)